

## XI-3 免疫電顕による透析アミロイドーシス分子 シャペロンに関する超微形態研究

○ 西 慎一<sup>1)</sup>、黒田 毅<sup>2)</sup>、和田庸子<sup>2)</sup>、中野正明<sup>3)</sup>

新潟大学医歯学総合病院血液浄化療法部<sup>1)</sup>

新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学講座腎・膠原病内科学分野<sup>2)</sup>、

新潟大学医学部保健学科<sup>3)</sup>

### 【目的と方法】

アミロイド細線維形成には分子シャペロン説があり、アミロイド前蛋白以外の分子の共存が必要であると言われている。

シャペロン分子の局在を免疫電顕を用いて検討し、アミロイド細線維との関係を考察した。

### 研究に使用した抗体と標的分子

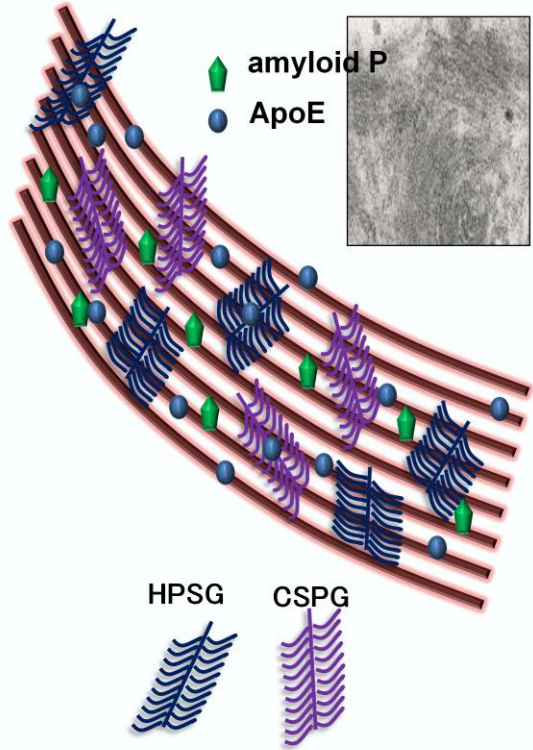
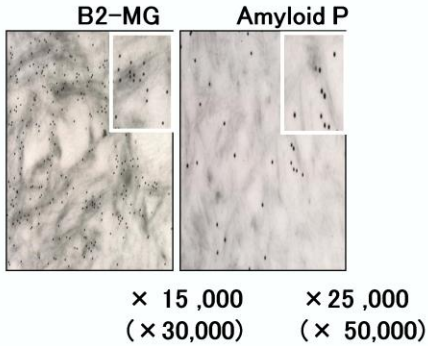
B2-MG (ミクログロブリン)	抗B2-MG抗体	DAKO社
アミロイドP蛋白	抗アミロイドP蛋白抗体	DAKO社
アポプロテインE(ApoE)	抗アポプロテインE(ApoE)抗体	DAKO社
HS(ヘパラン硫酸)PG	抗HSPG糖鎖抗体	生化学工業社
CS(コンドロイチン硫酸)PG	抗CSPG糖鎖抗体	生化学工業社

タイトル：免疫電顕による透析アミロイドーシス分子シャペロンに関する超微形態研究

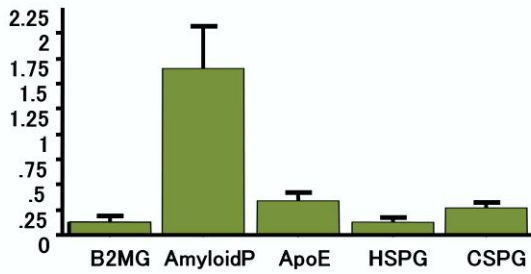
アミロイド細線維形成には分子シャペロン説があり、アミロイド前蛋白以外の分子の共存が必要であると言われている。

シャペロン分子の局在を免疫電顕を用いて検討し、アミロイド細線維との関係を考察した。

**β 2-MG amyloidosis免疫電顕 【結果と考察】**



単位面積当たりの金コロイド粒子密度比  
非細線維領域/ 細線維領域 (10ヶ所測定)



結果と考察: アミロイドP蛋白以外は細線維上にシャペロン分子の局在が主に認められた。

アミロイドP蛋白は細線維の間に主な局在が認められた。多くのシャペロン分子は細線維の周りを密接に取り囲むように存在するのかもしれない。しかし、アミロイドP蛋白

は主に細線維間に存在し、細線維の集合体形成に関与しているのかもしれない。